

近代日本が抱えた新旧文化の相克やそれに対する人々の本音が語られる

「身装」文化のデータベース構築から生み出された結晶の一つ

難波知子

大丸 弘・高橋晴子 著

▶日本人のすがたと暮らし

明治・大正・昭和前期の身装

12・20刊 B5判536頁 本体8000円

三元社



本書は、「身装」文化のデータベース構築という壮大なプロジェクトから生み出された副産物、いや結晶の一つだろう。明治維新(1868年)から第二次世界大戦終結(1945年)までの、日本人の「身体」と「装い」に生じた変容を具体的なエピソードをもとに論じた大著である。本書自体は、大阪の万博記念公園内にある国立民族学博物館(みんぱく)の「身装画像データベース」近代日本の身装文化」に組み込まれた「参考ノート」がもとになっている。しかし大著たる所以は、ここにたどりつくまでの著者の取り組みにある。まずは、そのとつもない大仕事について言及しておかねばならな

い。現在みんぱくから、服装・身装文化資料に関するデータベースは四種類提供されている。これらのデータベースは著者らが中心となって整備された。一つ目は、みんぱく(博物館)が所蔵する衣服・アクセサリーの標本資料と分析情報。二つ目は、身装文化に関する文献資料の検索が行なえるもの。ここには、明治以降現在までに刊行された図書や雑誌に加え、みんぱくが所蔵する外国語の民族誌文献も含まれる。またその種類も研究成果を発表した学術論文から、研究対象となる同時代資料に至るまで、約17万件がカバーされている。評者も学生時代にお世話になったデータベースである。

三つ目は、明治元年(1868年)から一年ごとに、日本人の身体と装いに関連した出来事をまとめた電子年表である。当時の新聞

雑誌や法令などから該当する記事が抽出され、約1万1000件のデータが収録されている。一部の出典については、「原資料」の画像が見られ、わざわざ資料を見に出かける必要がない。何ともしやらないサーブスである。四つ目は、三つ目の電子年表と対になる画像のデータベース。これまで収集されてきた資料から身装に関する画像が抽出・分類され、約5000点が自由に閲覧できる。身装、特に服装について知るために、画像資料は不可欠である。ここに本書のもととなる「参考ノート」が、画像の背景理解のために組み込まれている。ただし、本書は単なる画像の解説というにとどまらず、これまでの著者らの取り組み―すなわち何十万件という膨大な量の情報処理―を経てたどりついた珠玉の身装文化論といえる。量から質へ

一方、女性の場合は、人妻の肩削りとお歯黒の習慣がゆるやかに廃されていった。髪型も含め、肩削りやお歯黒はそれをする女性が未婚か既婚かを示す記号でもあり、それ

まで培われてきた女性美を体現するものでもあった。ところが、肩がなく、歯の黒い日髪)、絹ものを主体とする着物はできるだけ洗わずに、汚さないう工夫をしてきた(洗濯)に映ったように、文明国としての体裁を整えたい日本の為政者たちは、まず皇后・皇太后からそれらの風習を廃止した。しかしいったん定着した習慣を变えるには時間がかかり、江戸時代生まれのある老女は、大正時代までお歯黒を続けていたという(眼の周り「歯」唇)。

三つ目は、明治元年(1868年)から一年ごとに、日本人の身体と装いに関連した出来事をまとめた電子年表である。当時の新聞

雑誌や法令などから該当する記事が抽出され、約1万1000件のデータが収録されている。一部の出典については、「原資料」の画像が見られ、わざわざ資料を見に出かける必要がない。何ともしやらないサーブスである。四つ目は、三つ目の電子年表と対になる画像のデータベース。これまで収集されてきた資料から身装に関する画像が抽出・分類され、約5000点が自由に閲覧できる。身装、特に服装について知るために、画像資料は不可欠である。ここに本書のもととなる「参考ノート」が、画像の背景理解のために組み込まれている。ただし、本書は単なる画像の解説というにとどまらず、これまでの著者らの取り組み―すなわち何十万件という膨大な量の情報処理―を経てたどりついた珠玉の身装文化論といえる。量から質へ

一方、女性の場合は、人妻の肩削りとお歯黒の習慣がゆるやかに廃されていった。髪型も含め、肩削りやお歯黒はそれをする女性が未婚か既婚かを示す記号でもあり、それ

まで培われてきた女性美を体現するものでもあった。ところが、肩がなく、歯の黒い日髪)、絹ものを主体とする着物はできるだけ洗わずに、汚さないう工夫をしてきた(洗濯)に映ったように、文明国としての体裁を整えたい日本の為政者たちは、まず皇后・皇太后からそれらの風習を廃止した。しかしいったん定着した習慣を变えるのは時間がかかり、江戸時代生まれのある老女は、大正時代までお歯黒を続けていたという(眼の周り「歯」唇)。

ここで言及できた事例はごくわずかだが、本書には近代日本が抱えた新旧文化の相克やそれに対する人々の本音がありと語られている。時に生々しく露骨でさえある。だからこそ、読者の価値観が揺さぶられ、これまでとは異なる視点から日本人の「すがたと暮らし」が見えてくる。

思想

学術

尿が発生源である(環境悪 (お茶の水女子大学助教)